



今回は、2年1組1班による 紺乃(寿司屋) へのフィールドワークの報告をします。

◇ 紺乃を訪問し、食品を無駄にしない取り組みについて学びました！

日時：2018年8月2日(木) 10:00~12:00

訪問先：紺乃(関市内)

内容：食品を無駄にしない取り組みについて

参加者：加藤淳志 今井龍之介 上野桃可 岡本優奈 後藤樹実葉 篠崎和華

◇ 食品を無駄にしないためには

魚の骨を焼いたり干したりしてだしに使ったり、お寿司としては使わない切り身の部分を集めてちらし寿司やつまみれ等にし、写真のようなランチのメニューにすることによって低コストで食品をむだにしない取り組みがされています。

旬ではない時に食材を多くとってしまうとあまり売れずに食品ロスになってしまうので、旬のものは旬の時期に多くとるようにしているそうです。



しかし例えば賞味期限がまだある場合でも会社の期限を過ぎている場合や、品質が良くても地震や災害等によって品質が保証できなくなった場合は、ブランドを守るために捨てる必要があるという現状があります。その場合は、食品ロスをなくすためにも捨ててしまうものを安く知り合いに売るなどを行っているそうです。



◇ 私たちの感想

私たちは、食品ロスを減らすことをテーマに掲げ研究活動を行っています。今回のフィールドワークで食品ロスが起こる原因として、賞味期限や消費期限の問題、家庭内や飲食店での食べ残しなどがあることが分かりました。食品ロスを減らす方法として必要な分や食べきれだけの量を考えて使うことで、食材を最後まで使い切ることが大切であると思いました。今後は食材を必要な分だけ買う、使い切る、食べ切る・残った食材の活用をする・「消費期限」と「賞味期限」の違いを理解する・外食時での食べ残しを防ぐために小盛メニューがあれば利用する・食べ切れないと思ったら、少なめのものを注文することを大切にしていきたいと考えました。



SDGsのロゴより

今回は、2年1組2班による 関市保健センター へのフィールドワークの報告をします。

◇ 関市保健センターを訪問し、栄養について学びました！

日時：2018年8月1日(水) 10:00~11:00

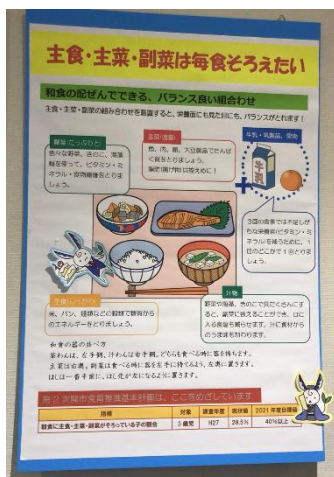
訪問先：関市保健センター

内容：現代の人の栄養について

参加者：高木沙綾 土屋まい 長谷川愛 波多野夏未 藤井智加 三島琴音

◇ 飢餓とは何か？～和食との関係性～

一般的に、飢餓とは「食べ物を十分に食べていない」と解釈されており、私たちの国、日本にはさほど関係のないことだと思いがちです。しかし、本当の飢餓とは、「栄養が偏っていること」、「栄養が取れていないこと」も飢餓に含まれます。実際、日本人は食料が得られないわけではありませんが、十分な栄養を摂取できていない人も多くいます。そして、近年の日本の問題は、栄養を過剰に摂取している人と不足している人との差が極端である栄養の二重負荷です。この栄養問題を解決していくために、少しずつ様々な取り組みが県ごとに行われています。その一つの取り組みとして、子供を対象とした「子供食堂」があります。



家庭の金銭的、時間的な事情で食事を満足にとることができない子供たちのために、低料金で食事を提供してくれるシステムです。また、社会福祉で行っている「フードバンク」は、衛生面や品質に問題はないものの、傷がついた、見た目が悪い、という理由で廃棄される予定だった食べ物を無料で生活貧困者に提供するという取り組みもあります。取り組みが少しずつ行われつつある中、個人で行えるものとしてあげられるものは、「一汁三菜」です。この、一汁三菜を意識して食事をとることは、現代の人に不足しがちな野菜類を食べることを含め、バランスの良い食事をとることにつながります。

今回、私たちは、栄養問題について知るために関市保健センターへ行きました。

◇ 私たちの感想 ～これからの栄養問題について考える～

自分たちにとって身近な食に関するテーマだったので、興味を持ち調べることができました。最初は、考えやすいテーマだと思っていましたが、本で調べたり、フィールドワークに行ったりすることを通して、日本にとっても重大な問題であり、これが引き起こす問題も多数あることが分かりました。日本にはこの飢餓問題を解決する日本人に合った和食という食文化があります。日々の生活で簡単に取り入れることができるので、一食、一品から和食生活を続けていくことを提案するとともに、私たちも意識的に取り組んでいきたいです。



SDGsのロゴより

今回は、2年1組3班による JICA中部 へのフィールドワークの報告をします。

◇ JICA中部を訪問し、世界の教育問題について学びました！

日 時： 2018年8月2日(木) 13:00～15:00

訪問先： JICA中部(なごや地球広場)

内 容： 世界の教育問題

参加者： 上垣茉穂 後藤茉優 後藤優菜 酒井夕奈 小林美波 藤吉楓

◇ 世界の教育問題について

世界では多くの子供たちが学校に通えていません。そのうち学校に行きたくてもいけない子供は5800万人います。その1つとしてソロモン諸島では教科書をみんなで共有して使っています。また、船で学校に通うため危険を伴います。私たちはそれらの問題を解決するための取り組みやその意義についてもお話を伺いました。協力する意義について次の2つのことを学びました。1つ目は、人道的な理由です。困った人に協力するのは日常生活でも当たり前のことです。それは、世界規模になっても同じことだと教えていただきました。

2つ目は、恩返しです。日本は、戦後や東日本大震災後にたくさんの国から多くの支援を受けました。その恩返しとして何ができるのかを考えると多くのことがあります。教育問題もその1つでした。日本規模ではできることを考えるのは難しいですが、個人で考えると実践できることが数多くあることも教えていただきました。具体的にはアクションを起こすことです。相手の立場に立ったうえで募金活動などを行う。ポスターを作る。問題について知らない人に話をするなどです。教育を受けられなくなった背景や歴史を知り広めていくことが教育問題の解決につながります。しかし、でたらめや自分が自信をもって話せないことを話してはいけないということも教わりました。



◇ 私たちの感想

私たちは、これらの活動を通して、世界の教育問題について詳しく知ることができました。今まで、教育問題に目を向けることはほとんどありませんでしたが、世界には学校に行きたくてもいけない子供が数多くいることが分かるとともに、改めて私たちは恵まれていると感じました。お話を伺ったなかではボランティアの派遣についても教えていただきました。これからは、この環境に感謝するとともに教育問題に対して、自ら活動について調べたり募金などに参加したりしていきたいです。そして参加した感じたことを周りに伝え、教育問題に対して関心がなかった人にももっと興味を持ってもらいたいです。



SDGsのロゴより

今回は、2年1組5班による フェアトレードショップ風 'sさん へのフィールドワークの報告をします。

◇ フェアトレードショップ風 'sさんを訪問し、世界の現状について学びました！

日時：2018年8月16日(木) 13:00~15:00

訪問先：フェアトレードショップ風 's 土井ゆき子さん(名古屋市東区)

内容：フェアトレードや、世界の飢餓問題について

参加者：青木翔哉 杉下晟作 足立龍之介 平尾萌華 平田望 大塚ありさ

◇ フェアトレードと日本のつながり、世界の飢餓問題



フェアトレードとは、発展途上国で作られた作物や製品を、適正な価格で物の輸出入をすることです。私たちが学んだことは、フェアトレードタウン、世界の様々な問題です。

フェアトレードタウンとは、町ぐるみでフェアトレードを知り、生活にとりいれていくことです。すでに世界の先進国が取り組んでおり、2015年に名古屋が指定されました。スタバ、無印良品、すき屋、イオンといった多くの有名な企業も取り組んでいます。今回訪問させていただいた土井ゆき子さんの

お店では、ゆき子さん本人がフェアトレードに携わり、様々な問題にかかわったり、小学校で講演を開いたりなどして、たくさんの人々に良さを伝えています。

いまの世界の現状は、人件費削減のための児童労働が問題視されています。最近では1億5800人以上の子供たちが働かされており、これは10人に1人の割合になります。この状況を改善するためにも、フェアトレード商品を手にとってみてはどうでしょうか。

◇ 私たちの感想

今回フェアトレードショップ風 'sさんを見学させていただいて、フェアトレードの商品で私たちが見たことのないような商品(服やアクセサリなど)もたくさんあり、フェアトレードで、発展途上国の貧困や、公正な取引を私たちが支える手段はたくさんあるということがわかりました。町ぐるみでフェアトレードタウンという取り組みをすることでその地域に住む人々の、フェアトレードに対する意識を、向上させているということも新たに知ることができました。

フェアトレードの商品を買うことは、発展途上国の人々を救うだけではなく、先進国の人々にも安全で安心な商品が届くことにつながり、私たちにも利益があるということを学びました。



SDGS のロゴより

今回は、2年1組6班による 森林文化アカデミー へのフィールドワークの報告をします。

◇ 森林文化アカデミーを訪問し、森林について学びました！

日時：2018年8月6日(月) 15:00~17:00

訪問先：美濃市森林文化アカデミー

内容：森林の破壊について

参加者：梅田拓海 柴琉晟 吉塚拓人

◇ 森林の現状

- ・唯一再生可能な資源であること。（再生に時間がかかる）
- ・過剰な伐採が起りやすい。
- ・多くの公益的機能を持つ。

植林活動によって森林は回復するが、多くの人、金がかかり、さらに、世界的な食料やバイオ燃料等の需用増加により、森林を伐採してオイルパームのプランテーションやサトウキビ農園、牧場へ転換する土地利用の転換が増加しており、焼畑農業は、焼き払った森林を数年程度農地として利用した



後に自然の回復力で森林に戻すというサイクルを繰り返す伝統的な農法ですが、近年、人口増加などにより、森林が回復しないうちに再び焼いて土地が劣化し、森林が再生なくなってしまうことが問題となっています。さらに、焼畑農業、農地開発のための火入れなどの火の不始末、落雷、干ばつや猛暑などが原因となり、森林火災が発生し、森林が焼失しています。泥炭や永久凍土がむき出しになることにより土壌から発生する二酸化炭素も問題となっています。そして、世界の木材需要の約半分を占める燃料としての利用です。特にアフリカでは木材需要の約9割が燃料として使用されており、人口増加に伴い、森林減少が進んでいます。

◇ 私たちの感想

多くの人にとっては、森林減少の問題について漠然としたイメージしかない、そもそも興味がないという現状のなかで、まずはそういった人たちに関心を持ってもらうこと、事実を知って明確なイメージを持ってもらうことが必要です。

今回のフィールドワークを通して森林についてのさまざまな問題について学ぶことができました。今後もこれらの問題について継続的に研究し、周囲の人々へ発信していくとともに、身近な生活に生かしていきたいと思えます。



SDGsのロゴより

今回は、2年1組7班による 精神福祉保健センター へのフィールドワークの報告をします。

◇ 精神保健福祉センターを訪問し、岐阜県の自殺率について学びました！

日 時： 2018年8月17日(日)

訪問先： 岐阜県障がい者総合相談センター(精神保健福祉センター)

内 容： 岐阜県の自殺率

参加者： 足立真衣、桜木美穂、坂元郁香、番野みらい、田口梨那

◇ 岐阜県の自殺の現状と対策

世界で見ると、日本は現在、先進7か国での自殺率が最も多いです。そこで、岐阜県の自殺率について調べてみました。

岐阜県の自殺者は、2016年時点で347人、自殺死亡率2016年時点では17.5で、全国の16.8を上回っています。自殺者が特に多い年齢は、80代以上です。その原因で最も多いのが、健康問題で次にお金や生活の問題、そして勤務中の問題や家庭問題が苦になって自殺につながっています。身近な人の死も自殺原因になることがあります。特に、高齢者の自殺や自殺未遂の原因は、うつ病が多いです。若い人たちは、数が多いわけではないですが、減ってはいません。また、男性のほうが自殺率が高く、女性は少ないですが、減っていません。

そして、死因が自殺の最も多いのは20歳から39歳です。自殺者のなかでは特に有職者が多く、次に無職者で年金をもらう生活をしている人が多いです。有職者の自殺率が高いのは、職場での人間関係や過重労働によるうつ病が主な原因です。それにより、20代～30代の自殺率が増加していると考えられます。

現在岐阜県では、自殺者を減らすために地域ボランティアなどと連携を図り、自殺対策ネットワーク強化に努めています。そして、自殺者だけではなく、自殺者遺族に対して話を聞いたり、同じような人たちでの遺族の会などの心のケアも行っています。岐阜県では、このように自殺率を減らす取り組みを行っています。



◇ 私たちの感想

私たちはこのSGH活動を通して普段はなかなか触れることがない日本の自殺の現状について調べました。インターネットやフィールドワークで学んだことは、ニュースで見るようなイメージとは違う部分もあり、確かな情報を自分たちで確かめることができたと思います。なので、私たちにできることは周りの人とかかわって、自分の居場所を見つけることで、生きていくための原動力の一つとしていくことです。そして、日々が活気に満ちていくことで自殺をしたいと思う気持ちがなくなると思います。また、もし周りに自殺したいと思っている人がいたら、できるだけ話を聞いたり、声をかけたりするだけでもその人を助けることにつながると思いました。



SDGsのロゴより